

盛岡に育つ銀座の柳 啄木が結ぶ縁

銀座の象徴 柳
啄木と節子が
新婚生活を送った家を見守る



啄木新婚の家

詩人石川啄木は、明治38年(1905年)5月、東京で処女詩集「あこがれ」を出版しそれをみやげに船郷の途についたが、金策の必要から途中仙台に下車して土井義章をその屋に訪ねた。仙台医学専門学校には郷友、猪狩見竜、小林茂雄らが在学中で、彼らと遊んで滞在すること10日におよんだ。その間、盛岡市榎子小路八番戸の借家には月末の30日に結婚式を挙げるべく婚約者の堀合節子とその帰宅を待ちわびていた。しかし啄木は遂に姿を見せなかった。そこでその夜級友上野宏一(画家)の媒酌で珍妙な「花婿のいない結婚式」がおこなわれた、それがこの家である。仙台をたった啄木は盛岡駅を素通りして浪民に行き、ようやくこの家に顔を見せたのは6月4日だった。ここではじめて新婚の夫婦と両親、妹光子の5人が揃って家庭をもったのである。時に啄木は別冊「我が四畳半」はよく新婚の夢あたたかな情景を描いている。ほかに「林上」

この柳は、平成十四年六月五日、東京・銀座の朝日新聞社跡にある啄木の歌碑の前で、銀座の商店会から盛岡市長に寄贈された「銀座の柳三世」です。

明治初期から銀座の並木として親しまれた柳は、一九六八年、街の整備に伴って郊外の河川敷に移植されましたが、その後大半が枯死。銀座金春通り会名誉会長の勝又康雄さんが「銀座の柳を再び」と、枝を挿し木してビルの屋上で育成し、二世・三世としてよみがえらせたものです。

啄木は、明治四十二年から没する明治四十五年四月までの約三年間、当時銀座にあった朝日新聞社の校正係として勤務しており、

「春の雪

銀座の裏の三階の煉瓦造に
やはらかに降る」
などの歌があります。

〈盛岡市説明板より〉

